

学位論文題名

漢字とその訓読みとの対応についての研究

学位論文内容の要旨

本論文は現在一般に行われている漢字とその訓読みの対応関係がどのように出来上がったのかを平安時代以降の辞書を中心の資料として考察したものである。

「常用漢字表」(1981、2010)を基準として一般の社会生活で最もよく使われる漢字とその訓読みを取り上げて、1字1訓の例に調査範囲を設定する。分析の方法は、平安時代を中心にして、鎌倉室町時代、江戸時代、明治時代から昭和時代初頭(以下、明治時代以降)まで過去の文献資料と比較しながら「常用漢字表」の漢字とその訓読みについて検討することによって行うが、その際に、①「常用漢字表」の漢字とその訓読みとの対応関係が平安時代以降においてどうなっているか、②確認できた漢字とその訓読みが各時代において一般的な読み方であったかどうか、の2点を中心に考察する。ここで言う一般的な読み方は、「定訓」と呼ばれてきたものを指す。

第1章では、現代日本語における漢字とその訓読みとの対応関係が平安時代以降においてどのように変遷したかを各時代の辞書を中心にして記述することが本研究の目的であることを述べて、論文構成と各章の内容を要約する

第2章では、まず、先行研究を整理して、小林芳規が訓点資料における「訓字」の使用に定訓の存在を認めること、峰岸明が上代文献の中の借用表記と『色葉字類抄』を利用して定訓の存在を証明すること、山田俊雄がキリシタン版『落葉集』を用いて漢字の和訓の位置から定訓かどうかを判断することを紹介して、上代から中世までの定訓の存在とその証明の方法を確認する。次に、「常用漢字表」(1981、2010)の内容を解説し、調査の基準を現代の定訓である「常用漢字表」(1981)に設定する。分析方法を単純化するため、所載の訓読みが一つである漢字762字に限定する。

第3章では、研究方法と調査資料とを詳論する。研究方法は、調査対象の漢字とその訓が各時代においてどれくらい確認できるか(対応関係の有無)、漢字とその訓読みがどの程度定着しているか(定着度または定訓の判定)の2点から行う。定訓の判定方法は、峰岸明による『色葉字類抄』の定訓(常用訓)の認定、山田俊雄による『落葉集』の定訓の認定を参考にして、辞書(国語辞書・漢和辞書)に搭載の漢字と訓読みによって行う。調査資料は、各時代を代表する国語辞書と漢和辞書を取上げ、さらに漢字と訓との対応を観察するに参考となる資料を各時代について一つ取上げる。すなわち、平安時代は国語辞書として三卷本『色葉字類抄』、漢和辞書として観智院本『類聚名義抄』、室町時代は国語辞書として『節用集』、漢和辞書として『倭玉篇』、江戸時代は国語辞書として『書言字考節用集』、漢和辞書として『増続大広益会玉篇大全』、明治時代以降は国語辞書として『大言海』、漢和辞書として『大

字典』を取り上げる。追加参考資料として平安時代は『訓点語彙集成』、室町時代は『落葉集』、江戸時代及び明治時代については『和英語林集成』と『和英袖珍新字彙』を取り上げる。

第4章では、「常用漢字表」所載の常用訓が一つの漢字(762字/語)を対象に、常用訓の品詞により名詞393字、動詞292字、形容詞57字、その他20字に分類し、平安時代の資料との対応関係の有無と定着度とを検討する。平安時代において対応が確認できる漢字とその訓読みは762字中497字(68.7%)であり、その他を除いて品詞による差は無い。次に、名詞393字に限定して訓の定着度を検討する。『色葉字類抄』は漢字に対する合点の有無と配列順位、『類聚名義抄』は和訓に対する声点の有無と配列順位、『訓点語彙集成』はその用例漢字と用例数によって判定した結果、定着度が高い漢字は名詞393字中174字(44.3%)であることを明らかにする。

第5章では、名詞393字に限定して、平安時代以降における漢字とその訓読みとの対応関係を分析し、どのような変化が見られるのかを考察する。室町時代において対応関係の確認できる漢字とその訓読みは平安時代に比べてあまり変化ないが、定着度は確実に高くなる。室町時代において対応の確認できる漢字とその訓読みは263字(66.9%)であり、定着度が高いものは全体の241字(62.1%)を占める。江戸時代・明治時代以降になると調査した漢字とその訓読みの大多数は現在と同じ対応関係をなしている。江戸時代は297字(75.6%)、明治時代以降は346字(88.0%)が現在の常用訓と一致する。この結果は、漢字とその訓読みの対応関係は平安時代から変化していないものが多く(約7割)、室町時代以降、それらが徐々に定着していくことを示している。

第6章では、調査結果に基づいて漢字とその訓読みとの対応に関する歴史的変遷をまとめた上で、現代の常用訓との対応が確認できない例について、その理由を分析し、多くは同訓異字の例であることを述べる。例えば「周」の訓「まわり」は古く「廻」や「回」を宛てる。その他に、語形変化(例:「器(うつわ)／ウツワモノ」、「襟(えり)／コロモノクビ」)、国訓の発生(例:「沖／おき」)などを指摘する

第7章では、本論文の意義をまとめ、残された課題を整理する。本論文の意義としては、1字1訓の名詞に限定されるが現在の常用字・常用訓がどのように変遷したかについて大筋を把握してその定着の様相を記述したこと、『訓点語彙集成』を活用して定訓を研究した初めての成果であること、国語資料として利用の少なかった江戸時代の『増続大広益会玉篇大全』を活用して定訓の資料としたことなどがある。最後に今後の課題として、各資料の個別事情を詳細に検討する必要があること、室町時代以降の定訓の判定方法を更に洗練させるとともに名詞以外について調査を行うこと、1字1訓だけに限定せず1字複数訓の例について調査を行うことなどを指摘して締めくくりにする。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 池 田 証 壽
副 査 教 授 加 藤 重 広
准教授 近 藤 浩 之

学 位 論 文 題 名

漢字とその訓読みとの対応についての研究

本論文は現在一般に行われている漢字とその訓読みの対応関係がどのように出来上がったのかを平安時代以降の辞書を中心の資料として考察したものである。

調査の範囲は、「常用漢字表」(1981、2010)を基準として一般の社会生活で最もよく使われる漢字とその訓読みを取り上げて、1字1訓の例に設定する。分析の方法は、平安時代を中心にして、鎌倉室町時代、江戸時代、明治時代から昭和時代初頭(以下、明治時代以降)まで過去の文献資料と比較しながら「常用漢字表」の漢字とその訓読みについて検討することによって行う。その際、①「常用漢字表」の漢字とその訓読みとの対応関係が平安時代以降においてどうなっているか(対応の有無)、②確認できた漢字とその訓読みが各時代において一般的な読み方であったかどうか(定着度の判定)、の2点を中心に検討する。ここで言う一般的な読み方は、「定訓」と呼ばれてきたものを指す。②定着度の判定(定訓の判定)の方法は、峰岸明による『色葉字類抄』の定訓(常用訓)の認定、山田俊雄による『落葉集』の定訓の認定を参考にして、辞書(国語辞書・漢和辞書)に搭載の漢字と訓読みによって行う。調査資料は、各時代を代表する国語辞書と漢和辞書を取り上げ、さらに漢字と訓との対応を観察するに参考となる資料を各時代について一つ取り上げる。すなわち、平安時代は国語辞書として三巻本『色葉字類抄』、漢和辞書として観智院本『類聚名義抄』、室町時代は国語辞書として『節用集』、漢和辞書として『倭玉篇』、江戸時代は国語辞書として『書言字考節用集』、漢和辞書として『増続大広益会玉篇大全』、明治時代以降は国語辞書として『大言海』、漢和辞書として『大字典』を取り上げる。参考資料として平安時代は『訓点語彙集成』、室町時代は『落葉集』、江戸時代及び明治時代については『和英語林集成』と『和英袖珍新字彙』を取り上げる。

調査は「常用漢字表」所載の常用訓が一つの漢字(762字/語)を対象に、常用訓の品詞により名詞393字、動詞292字、形容詞57字、その他20字に分類して行う。まず平安時代の資料との対応関係の有無と定着度とを検討した結果、対応が確認できる常用字・常用訓は762字中497字(68.7%)であり、その他を除いて品詞による差は無いことが分かった。次に、名詞393字に限定して訓の定着度を検討し、『色葉字類抄』は漢字に対する合点の有無と配列順位、『類聚名義抄』は和訓に対する声点の有無と配列順位、『訓点語彙集成』はその用例漢字と用例数によって判定した結果、定着度が高い漢字は名詞393字中174字(44.3%)であることを明らかにした。

次に、名詞 393 字に限定して、平安時代以降における対応の有無を検討した結果、室町時代において対応関係の確認できる漢字とその訓読みは平安時代に比べてあまり変化ないが、定着度は確実に高くなること、室町時代において対応を確認できる漢字とその訓読みは 263 字(66.9%)であり、定着度が高いものは全体の 241 字(62.1%)を占めることが分かった。江戸時代・明治時代以降になると調査した漢字とその訓読みの大多数は現在と同じ対対応関係をなしている。江戸時代は 297 字(75.6%)、明治時代以降は 346 字(88.0%)が現在の常用訓と一致する。この結果は、漢字とその訓読みの対応関係は平安時代から変化していないものが多く(約 7 割)、室町時代以降、それらが徐々に定着していくことを示している。最後に対応の確認できない例を検討して、たとえば「周」の訓「まわり」は古く「廻」や「回」をあてる等、多くは同訓異字の例であることを述べる。

本論文の成果として特筆すべきは、「常用漢字表」に示される漢字とその訓読みとの対応は平安時代において既に 7 割程度まで認められることを実証的に明らかにした点である。平安時代以降、その対応の比率は徐々に上昇し明治時代に至って 9 割程度に達する。現代の日本語の文字表記法は、明治時代以降、人為的な整理が相当に加わって形成されたと見込まれ、そうした観点からの分析を今後に導く成果となっている。また、漢字とその訓読みとの対応がいかに定着しているか、その定着度・定訓を判定する方法について、これまで多くの研究者が採用した『色葉字類抄』の訓と漢字の掲出順位との対応による方法の他に、『類聚名義抄』の和訓の掲載順位と『訓点語彙集成』における出現状況とを関連させる方法を新たに加えている。『増続大広益会玉篇大全』の附訓方法に定訓の意識があることを指摘した点も大きい。今後の発展が期待できる材料を数多く提供している。本論文は「常用漢字表」に掲載の 1 字 1 訓の例に限定してシンプルな調査・分析で、説得的な論文記述となっている。1 字 1 訓以外の例についても基本線は変わらないと予想されるが、最終的には「常用漢字表」に掲載のすべての訓読みについて、その対応と定着の様相を調査・分析することが期待される。その達成によって、現代日本語の表記の基準である「常用漢字表」の訓読みについて、確固たる学問的根拠が与えられることとなろう。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。